

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520912

研究課題名(和文) アフリカ妖術研究の理論を検証する ウガンダの事例にもとづく微視的分析

研究課題名(英文) Re-examining Theories on African Witchcraft: A Micro-analysis of Cases in Uganda

研究代表者

梅屋 潔 (UMEYA, Kiyoshi)

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：80405894

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：妖術にまつわる事件についての新聞、雑誌、官報などの印刷物の収集と利用可能な文献などの情報を通じて、また、ウガンダ共和国において現地調査を行った際に蓄積した民族誌資料を検討した。現地での聞き書きにおいて最近の旧ブガンダ王国の領域内はhuman sacrifice(人身御供)にまつわる事件が頻発していることが明らかとなり、近隣に比してその数が著しく、ブガンダ王国についてはゲシーレの報告にあるカメルーンの例とは異なっており、王国が妖術の管理機能を担っていない傍証のひとつとなった。また、牧畜社会において根強い「呪詛」などの正当妖術の存在がこうした猟奇殺人の歯止めになっている可能性も見いだされた。

研究成果の概要(英文)：During my fieldwork in mainly eastern and central Uganda focusing on a few societies and information collected from libraries in Japan and Uganda huge amount of ethnographic data was examined from a micro-level analytical perspective. The examined data does not support, at least empirically, the scheme of 'modernity of witchcraft' by Peter Geschiere and the Comaroffs' notion that millennium capitalism might accelerate the rampancy of witchcraft completely. Field data has been carefully revised reflexively using PDCA cycle. Older archival documents in libraries in the UK should have been referred, and farther ethnographic research should have been carried out among pastoralists in north-eastern Uganda. The limitations of this research should be overcome in forthcoming research.

研究分野：社会人類学

キーワード：妖術の近代 アフリカ 人類学理論 Human Sacrifice ウガンダ 民族誌 王国 近代化

1. 研究開始当初の背景

アフリカ妖術研究は、近年二つの軸に沿って展開している。一つの軸はポスト・アパルトヘイトの南アフリカにおける事例にもとづいてコマロフ夫妻 (Commaroff&Commaroff 1993, 2001) が提唱するスキームである。近代化と脱植民地化そしてアパルトヘイトからの脱却に伴う政策の帰結である「千年紀資本主義」の浸透による世代間などの貧富の格差と階級間格差の拡大が、妖術の質を変え、妖術にまつわる、とりわけ暴力的な事件の温床となっているという。ザイオニスト教会での儀礼は、この状態をローカルな視点から「飼い慣らす」ための抵抗の側面をもつという。このスキームで妖術を分析する追随者は多いが、それぞれが分析対象とする社会は急激な社会変化を経験した特徴的な社会がほとんどで、しかも教団やカルトなど集合的な社会の動態に焦点が絞られている。いくつか例を挙げると、ニジェールのポリ憑依カルト、急激に都市化の進んだ進んだナイジェリア、かつて銅で繁栄したザンビアのンゴニ社会などである。

いまひとつの軸は、カメルーンにおけるフィールドワークによる資料からゲシーレが提唱するいわゆるモダニティ論である (Geschire 1997)。ゲシーレによれば、カメルーンにおいて資本主義の浸透と近代国家システムの導入は、そこに資本が蓄積されるエリート層を形成し、貧富の格差の増大を生んだ。この現象は、カメルーンのマカの人々にとってはエリートが妖術を使って富を蓄積したと考えられた。このように、妖術はモダニティのなかでむしろ活気づいてくる、とゲシーレは説く。ゲシーレの調査したカメルーンのマカ社会は、資本主義が浸透してもなお、切断されえない血縁関係が妖術を媒介とする関係として維持されていた地域だった。そこでの妖術告発は、エリートを巻き込んだモダンな社会問題を次々と生み出したのである。一方アフリカ歴史学の泰斗レンジャーは、これらのメタレベルでの分析にこだわりすぎると妖術の本質を見失ってしまうと警告し、安易に脱植民地化やグローバル化に妖術を結びつけることの可否を問う。これらのマルクス主義的仮説に理論的に疑義を差し挟む論者もあらわれているが、実証的には検証されてはいなかった。この二つの立場は当該分野の研究では依然として無視できない仮説であることは間違いがない。さてゲシーレは同じカメルーンでも、西部カメルーンでは、妖術の力が王権にコントロールされ、マカのような新しい妖術が認知されない事例を報告している。この報告から申請者は、王国がかつて西部および中央部に複数存在し、しかも東部および北東部には、カメルーンのマカ社会のような分節リニジを統合原理とするニール系民族が分布し、またなおかつ近年ペンテコステ派の教会が急速に勢力を伸ばしつつあるウガンダでの調査が、

これらの仮説の蓋然性を検証するのに適切であると着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現在のアフリカ妖術研究の定説の蓋然性を実証的な資料にもとづいて検証することにある。植民地化と脱植民地化によってアフリカの妖術信仰は質的に変化したのか、あるいは量的な変化や道具立ての変化にすぎないのか、検証に適していると思われるウガンダにおけるフィールドワークにもとづいて実証的に検証することにあつた。近年アフリカの妖術研究を席卷するコマロフ夫妻の仮説は、植民地化とそれに続く脱植民地化といった時期に顕在化した千年紀資本主義による貧富の格差が妖術信仰を激化させる温床である、というものである。またゲシーレも地域差を認めつつも資本主義の浸透と近代国家の成立が格差拡大を生み、妖術の活性化に一役買っているとする立場を打ち出している。コマロフ夫妻やゲシーレなどその理論的随伴者の扱ったものとは異なった条件を示す調査地も選んで概してマクロな視点で展開している仮説を、ミクロな視点から検証するのが本研究の目的であつた。

3. 研究の方法

本研究計画では、妖術にまつわる事件についての新聞、雑誌、官報などの印刷物の収集と、現地調査での録音・録画などによって記録されるインタビューや歌などの言語資料の蓄積という二つの作業からなっていた (補足的なものとして映像資料も蓄積した)。具体的にはウガンダと日本におけるライブラリーワークと、ウガンダにおける数カ所の比較参照点および首都カンパラにおけるフィールドワークが本計画の柱となった。フィールドワークにおいては、事前にウガンダ側の研究協力者 (マケレレ大学・エドワード・キルミラ教授) をふくむウガンダ国における研究支援体制を構築し、質問項目の作成や調査地の選定に万全を期した。社会状況が異なる複数の調査地における調査 (ゲシーレの報告を検証するためにも王国の影響が強い地域を含む)、資本主義の影響が著しい都市部と相対的に影響が弱い農村部とで妖術の増大や激化の程度や質に差が認められるかどうか検証する調査、個人の不幸の出来事の解釈に焦点を絞り、ミクロな視点からの妖術の分析 (その際ペンテコステ派教会の構成員の特徴との差異を十分に勘案したうえで比較検討する) そして植民地化 (ウガンダの場合保護領化) 以前の状況を十分に視野に入れた調査が必要である、というのが申請者の見解である。従って、(1) 資本主義の影響が最も強い首都カンパラ、(2) 資本主義の影響がさほど強くない農村地帯、(3) 王国の権威が影響力を持つ旧王都付近、(4) 分節リニジが統合原理となっている牧畜

民居住地域などの比較参照点をもうけてフィールドワークを行い、資本主義の浸透の度合いを参照しつつ、それぞれの地域で起こった妖術告発事件など妖術に関連する事件の資料を蒐集することをめざし、併せて当該地域でのインタビューをもとに妖術の質的変化が現地の人々にとって実感を伴うものであるかそれぞれの事件についてミクロな視点から検討した。二つの仮説はあまりにマルクス主義的で、人々の生を一枚岩の階級論的な存在としてしか扱っていないという欠点があると考えからである。さらに、保護領時代の文書などから保護領時代の妖術にかかわる事件の実態を再現して、コマロフ夫妻やゲシーレのスキームが調査地においてどの程度蓋然性を持ちうるかを検討した。

4. 研究成果

妖術にまつわる事件についての新聞、雑誌、官報などの印刷物の収集と利用可能な文献などの情報を通じて、また、H.24.8.15 から H.24.9.20 まで、H25.8.29 から H25.9.26 および H26.12.25 から H26.1.7 までウガンダ共和国において現地調査を行った際には、マケレレ大学人文社会科学カレッジ副学長エドワード・キルミラ教授、同学部歴史学科オドイ・タンガ講師、前ムバララ大学前学長ラファエル・オウオリ教授などの研究支援チームを背景に、民族誌資料を蓄積した。現地での聞き書きにおいて最近の旧ブガンダ王国の領域内は human sacrifice (人身御供) にまつわる事件が頻発していることが明らかとなり、近隣に比してその数が著しく、ブガンダ王国についてはゲシーレの報告にあるカメルーンの例とは異なって、王国が妖術の管理機能を担っていない傍証のひとつとなった。また、牧畜社会において根強い「呪詛」などの正当呪術の存在がこうした猟奇殺人の歯止めになっている可能性も見いだされた。カラモジャでのフィールドワークは実現しなかった。

【参考文献】

Commaroff, J. & John L. Commaroff 1993 *Modernity and Its Malcontents: Ritual Power in Postcolonial Africa*, Chicago: University of Chicago Press.
Commaroff, J. & John L. Commaroff 2001 *Millennial Capitalism and the Culture of Neo-liberalism*. Durham.
Geschiere, P. 1997 *Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*. Charlottesville: University of Virginia Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

梅屋潔「大湖地方の王国の盛衰、牧畜民の

移動 保護領化以前」白石壮一郎・吉田昌夫編著『ウガンダを知るための53章』48-53頁、2012年1月

梅屋潔「死者を葬る 農村の災いと死、そして施術師について」白石壮一郎・吉田昌夫編著『ウガンダを知るための53章』176-180頁、2012年1月

梅屋潔「アフリカのある村における死霊の観念と施術師、そして呪い歌」『地域構想学研究教育報告』第2号、70-80頁、2012年3月

梅屋潔「「憑きもの」研究の理論的展開を占う 近藤論文へのコメント」(「魅了される遭遇」から生まれる動物信仰 隠岐の島町某地区0家の事例から)『現代民俗学研究』第5号掲載)『現代民俗学研究』第5号、現代民俗学会、87-94頁、2013年3月

梅屋潔「多様な生を「民族誌」からうかがい知る(1) <生の技法 多様な生を多様に生きるには>」『三色旗』782号(2013年5月号) 慶應義塾大学通信教育部、27-33頁、2013年5月

梅屋潔「焼畑農耕民「ヤノマミ」と採集狩猟民サンの「秘密」 多様な生を「民族誌」からうかがい知る(2) <生の技法 多様な生を多様に生きるには>」『三色旗』783号(2013年6月号) 慶應義塾大学通信教育部、31-36頁、2013年6月

梅屋潔「牧畜民「ヒンバ」とナミビアの電力自給率向上政策 多様な生を「民族誌」からうかがい知る(3) <生の技法 多様な生を多様に生きるには>」『三色旗』784号(2013年7月号) 慶應義塾大学通信教育部、30-37頁、2013年7月

UMEYA, Kiyoshi 'What is the source of power?: A Case of the evangelized witch in eastern Uganda,' Panel G20 (convenors: David Parkin, Akira Okazaki, and Katsuhiko Keida), Trust in super-diversity. The 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, IUAES2013, University of Manchester, 5th-10th August 2013, Conference Programme, pp.127-128, 2013年8月

梅屋潔「東アフリカの「怪談」? ウガンダ東部アドラ民族の場合」Synodos: Academic Journalism, 2013.08.29, Thu[<http://synodos.jp/>]

梅屋潔「コンゴの「ステルス紛争」をめぐって 多様な生を「民族誌」からうかがい知る(4) <生の技法 多様な生を多様に生きるには>」『三色旗』786号(2013年10月号) 慶應義塾大学通信教育部、30-43頁、2013年10月

梅屋潔「ウガンダ東部アドラ民族における okewo の儀礼的特権 現地語 (Dhopadholo) 資料対訳編」『人間情報学研究』第19号、9-28頁、2014年3月

梅屋潔「物語論」から「象徴論」、そし

て「アート・ネクサス」へ? 「憑きもの」および民俗宗教理解のために」『現代民俗学研究』第6号、現代民俗学会、5-26頁、2014年3月

梅屋潔「ふたりの調査助手との饗宴(コンヴィヴィアリティ) ウガンダ・アドラ民族の世界観を探る」『フィールドに入る(FENICS 百万人のフィールドワーカーシリーズ、第1巻)』(椎野若菜・白石壮一郎編)古今書院、158-181頁、2014年6月

梅屋潔「葬送儀礼についての語り ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウォの儀礼的特権」『森羅万象のささやき 民俗宗教研究の諸相』(鈴木正崇編)風響社、375-396頁、2015年3月

梅屋潔「民族」としての「民俗学者」『歴博』191号、2015年7月

〔学会発表〕(計14件)

梅屋潔2012.5.26「死霊は、「恐怖」の対象か? ウガンダ東部アドラ人の感情世界」第20回日本感情心理学会、於神戸大学瀧川記念会館

梅屋潔2012.6.30「大統領アミンに殺害された、その右腕 60年代~70年代のウガンダの政治シーンを垣間見る」シンポジウム: アフリカ諸国における独立後50年の回顧と展望 独裁制と独裁者の再検討」平成22年度~4年度、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「現代アフリカにおける独裁者の虚像と実像に関する民族学的研究」(研究代表者:阿久津昌三信州大学教授)の研究成果報告会(信州大学)

梅屋潔2012.12.15「震災後の気仙沼をあるく 民俗芸能を通してみるコミュニティの原像」桜美林文化人類学学生研究会(OSSCA)第4回講演会「つながりのはじまり 震災後をともに生きる」(金田諦應住職との対談含む)桜美林大学

梅屋潔2013.3.7「コメント」宇沢美子「人種ステレオタイプの公共性とその変容」(2012-2013年度研究プログラム:メディアの変容と文化の公共性)神戸大学国際文化学研究所メディア文化研究センター

梅屋潔2013.3.16「1960年代~1970年代ウガンダの政治シーンを垣間見る オフンビ家文書からみた」ウガンダ・アルバート湖岸の漁村に生成する共同性 移動と漁労に住まう人びと」平成22~25年度科学研究費補助金(連携研究者、基盤研究(B)、研究代表者: 田原範子四天王寺大学教授)報告会、大阪市立大学文化交流センター

梅屋潔2013.7.13「ゴールド・スキャンダル前夜 オフンビ家文書に垣間見る紛争の内幕」平成23~28年度基盤研究(S)「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」(研究代表者 太田至京都大学教授)社会・文化ユニット第11回研究会、京都大学稲盛記念館中会議室

梅屋潔2013.8.6 What is the source of

power?: A Case of the evangelized witch in eastern Uganda, IUAES2013, Manchester, UK; 5th-10th August 2013, PanelG20 (convenors: David Parkin, Akira Okazaki, and Katsuhiko Keida), Trust in super-diversity.

梅屋潔2013.10.24「震災後の三陸漁村をアフリカニストがあるく」アフリカ・セミナーの会(会長:富永智津子宮城学院女子大学元教授、顧問:山形孝夫宮城学院女子大学名誉教授) 仙台国際センター

梅屋潔2013.11.2「それでも「お年取り」の儀礼は行われた 気仙沼市鹿折地区浪板および小々汐の年越し行事にみる「祈り」」気仙沼市民公開講座2013「未曾有の災害に/気仙沼はどのように/向き合ってきたのか」主催:東北学院同窓会気仙沼支部・気仙沼市教育委員会・東北学院大学東北学院大学ボランティアステーション、東北学院大学同窓会気仙沼支部、共催:東北学院大学災害ボランティアステーション・東北学院大学地域共生推進機構・東北学院同窓会、後援:河北新報社・三陸新報社、於:旧・気仙沼河北ビル

梅屋潔2014.2.8「限界集落の現状とイエ・イデオロギーの崩壊と残存 新潟県佐渡市の事例から」信州アカデミア連続講演会、長野県における限界集落と地域再生/活性化を考える、信州大学教育学部

梅屋潔2014.9.28「民俗学の論点2014 いま民俗学が論じ、取り組むべきこと」現代民俗学会第25回研究会、東京大学東洋文化研究所

UMEYA, Kiyoshi 2014.10.26 Rethinking the Order: Cultural Concepts of Death, Spirit and Ancestor with Special Reference to Jopadhola. ウガンダ大使 Her Excellency, Mrs. Betty Grace Akech-Okullo 臨席「ウガンダ大使を囲む会 Tugende Osaka」於 Party Stage Campagne

梅屋潔2014.11.8「コメント 日本の無形文化遺産」(菅豊「無形文化遺産を人はどう受け止めたのか? 制度がずれる/制度をずらす」高倉浩樹「震災後の緊急無形文化財調査と防災調査体制構築へ」へのコメント)公開フォーラム文化遺産の人類学、国立民族学博物館

梅屋潔2015.1.10「複数の「被災地」をつなぐ?あるいは「比較」の可能性をさぐる」(東北大学東北アジア研究センター共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」研究代表者高倉浩樹)東北アジア研究センター、4階会議室

〔図書〕(計5件)

『ウガンダを知るための53章』(白石壮一郎・吉田昌夫編著)明石書店、2012年1月

『中東・アフリカ』(世界地名大辞典第3巻)朝倉書店、総頁数1174頁、2013年7月

『世界人名大辞典』岩波書店、総頁3586

頁、2013年12月

『フィールドに入る (FENICS 百万人のフィールドワーカーシリーズ、第1巻)』(椎野若菜・白石壮一郎編)古今書院、2014年6月

『森羅万象のささやき 民俗宗教研究の諸相』(鈴木正宗編)風響社、2015年3月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

TOP of Kiyoshi Umeya's Official Web Site

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~umeya/site01/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅屋 潔 (UMEYA, Kiyoshi)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・准教

授

研究者番号: 80405894

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

Edward Kirumira

Raphael Owor

Fredrik Tanga Odoi